

# 「高祖大師秘密縁起」考

— 安楽寿院本の構成と内容 —

## 要旨

「高祖大師秘密縁起」は、弘法大師空海の伝記を主題とする絵巻の一系統である。その成立は十三世紀後半と推定されているが<sup>(註1)</sup>、現存作品は少なく、管見の限りでは五件が紹介されているにすぎない。その中で完本として最も古いものは、応永二年(一四六八)の年記を持つ安楽寿院本であり、これについては、既に詞書全文の翻刻<sup>(註2)</sup>、および全巻の白黒写真<sup>(註3)</sup>が公刊されている。しかし、その具体的な内容に関しては、論及はおろか、解説さえ充分にはなされていないのが現状である。

そこで本稿では、「高祖大師秘密縁起」についての考察の一環として、まず完本の安楽寿院本を取り上げ、その構成と内容を一覽する。その際、本絵巻の特質を明らかにするために、他系統の大師伝絵巻との比較を行い、また、これらの絵巻の典拠になったと推定される漢文の弘法大師伝諸本との関連を検討する。ただし、ここでは紙数の都合により、その結果を総合的に考察する余裕がないので、この点は、「高祖大師秘密縁起」の他の現存作品の検討とともに別稿に譲ることとする。

## 緒言

安楽寿院蔵「高祖大師秘密縁起」は十巻六十六段からなる。本稿では、その全段の内容を、これと同じ頃に成立したと推定される六巻本「高野大師行状図画」、および六巻本の増補本で、白鶴美術館本の年記から少なくとも元応元年(一三一九)までには成立していたことが知られる十巻本「高野大師行状図画」と比較しながら一覽する。比較対象には、六巻本は地藏院本、十巻本は白鶴美術館本を用いる<sup>(註4)</sup>。なお大師伝絵巻には、このほか「弘法大師行状絵詞」十二巻と版本「高野大師行状図画」十巻の二系統があるが、これらはずつと遅れて成立したもので、今回の比較対象からは除外する。ともに「高祖大師秘密縁起」の影響下にあるものとして興味深い<sup>(註5)</sup>が、この問題は十巻本あるいは版本の側から改めて検討することにした。

また、数多くある漢文の弘法大師伝のうち、「高祖大師秘密縁起」が成立したと推定される十三世紀後半までに成立していたとされるものを対象とし、本絵巻との関連を検討する。テキストには長谷宝秀編『弘法大師伝全集』(以下『全集』)<sup>(註6)</sup>を用いる。同書には全九十三点の大師伝資料が、ほぼ成立時代順に収録されているが、対象とな

\*塩出 貴美子

るのは四十九番目の承澄編『弘法大師略伝』までである。以下、本稿で言う「大師伝」は、基本的には、ここまでの範囲を指すものとする。なお、類似した名称が多いので、これに通し番号を打ち、資料名の前に付しておく。ただし、四点ある大師の『遺告』は通し番号(2~5)と『遺告』で略称し(遺告)、これらを総括して言う場合には『遺告』とのみ記す。

ところで、安楽寿院本と他系統の大師伝絵巻との比較については、既に梅津次郎氏が一覧表を作成している(註1)。これは版本および十巻本を基本とし、そこに安楽寿院本の内容を対応させたものである。三者の関係がわかりやすく示されており、益するところ大であるが、一部に遺漏が見られる(註2)。また、筆者が担当した『角川絵巻物総覧』の解説は、安楽寿院本の各段に白鶴美術館本の事蹟名称を対応させたものであるが(註3)、これも一部に訂正の必要があり、それについては各所で注記する。

さて、本稿末の安楽寿院蔵「高祖大師秘密縁起」と諸本の対応関係一覧表は、安楽寿院本と地藏院本および白鶴美術館本との対応関係、また安楽寿院本と大師伝のうち主要なもの七点との対応関係を一覧表にしたものである。本題に入る前に、この表の見方を説明しておく。

- ・ 大師伝絵巻の欄には、安楽寿院本の詞書の内容を基本とし、地藏院本および白鶴美術館本のそれぞれについて、これと同じあるいは類似した内容を表す段の事蹟名称(註4)を示した。ただし、少しでも共通する文言があれば対応するものとして取り上げたので、段全体では、内容がかなり異なっている場合もあるが(例、2-4「諸処練行」)、その点については本文中で述べる。横棒線は対応する事蹟がないことを示す。

・ 事蹟名称の前に付した数字は、巻と段を表す。例えば「1-1-1」は「第一巻第一段」の略である(以下、本文も同様)。

- ・ 地藏院本および白鶴美術館本の事蹟名称の後ろの数字は、それぞれの絵巻について、第一巻第一段を①とし、同第二段以降に順に付した通し番号である。これを見れば、それぞれの絵巻における事蹟の展開順序がわかる。

絵については、残念ながら本文中では述べた余裕がないので、図様の対応関係を次のように記号化し、地藏院本および白鶴美術館本の欄内右端に示した。

- A 安楽寿院本と同じ、あるいは類似した事蹟内容を描くもの。ただし場面の数、構図、モチーフ表現などに見られる異同は全て無視する。

A1 Aに該当するが、安楽寿院本が描出する事蹟内容の一部が欠けているもの。

A2 Aに該当するが、安楽寿院本が描出していない事蹟内容を付加するもの。

B 詞書には安楽寿院本が描く場面に対応する内容があるが、絵は異なる場面を描くもの。

B1 詞書に安楽寿院本が描く場面に対応する内容がなく、絵は異なる場面を描くもの。

C 詞書には安楽寿院本が描く場面に対応する内容があるが、それを描いていないもの。

D 安楽寿院本が描いていない事蹟を描くもの。

・ 大師伝の欄には、検討の対象とした四十九点から特に注目したい七点を選び、各資料名は『全集』に付した通し番号で示した(註5)。欄内の数字は、各資料ごとに安楽寿院本の事蹟に対応する記述を検索し、掲載順に付した通し番号である(註6)。空欄は対応する事蹟がないことを示す。

## 安楽寿院本の構成と内容

では、第一巻第一段から順に見ていくことにしよう（表参照）。

1—1 「誕生靈瑞」（図1） 大師の父母が、天竺から飛来した「聖人」が懐に入る夢を見て大師を懐胎したという事蹟。絵は、父母のもとに僧形の「聖人」が飛来するところ。地藏院本および白鶴美術館本でも第一巻第一段に置かれており、詞書の文言および構図はやや異なるが、その趣旨と描出内容はほぼ同様である。大師伝では『遺告』に大師十二歳のとき父母が語った話（1—4 「幼稚遊戯」参照）として記載されて以来、変化することなく、ほとんどの資料に収録されている。なお表の大師伝の欄では、大師の誕生が独立した項目として扱われている場合には単独番号を付したが、大師十二歳の時の父母の語りの中だけ見える場合は「幼稚遊戯」の番号に丸括弧を付して示した。

1—2 「夢与仏語」 五、六歳の頃、常に八葉蓮華に座して諸仏と語る夢を見たという事蹟。絵は、父母が幼い大師を慈しむところと、大師が仏と語るところ。

1—3 「四王執蓋」 讃岐国に下った勅使は、四天王が大師に蓋を差しかけながら随従しているのを見て、馬から下り礼拝したという事蹟。絵は、勅使が大師を礼拝するところ。

1—4 「幼稚遊戯」 十二歳のとき、父母から僧となるべき由縁（1—1 「誕生靈瑞」参照）を聞いて歓喜し、泥土で仏像を造り、草堂に安置供養したという事蹟。絵は、仏像を造るところと、礼拝するところ。

右の三段は、いずれも幼児期の奇瑞を表したものである。地藏院本および白鶴美術館本では構成が異なり、「夢与仏語」と「幼稚遊戯」を合わせて一段とし、その後「四王執蓋」を置く。また、大師の年

齢については「夢与仏語」に対応する部分に「五六歳」とあるのみで、「幼稚遊戯」に対応する部分には記載がなく、強いて言えば、文脈からは同じ頃のことのように読み取れる。絵は「四王執蓋」も含め、四回登場する大師を全て同じ幼児の姿で描いており、この点からも、地藏院本および白鶴美術館本が右の三事蹟の年齢差を意識していないことは明らかである。一方、安楽寿院本の絵は「夢与仏語」と「四王執蓋」の大師を垂髪、「幼稚遊戯」を結髪とし、あまり明確ではないが、多少は年齢差を意識しているように見える。なお地藏院本および白鶴美術館本の絵には、「夢与仏語」の第一場面（父母が幼い大師を慈しむところ）がないので、この部分の対応関係はA1に分類した。そのほかは同じ内容を描いているのでAとした。

大師伝では「夢与仏語」と「幼稚遊戯」の二事蹟は『遺告』で語られて以来、諸書に収録されている。「四王執蓋」は14『金剛峯寺建立修行縁起』（以下「修行縁起」）に初出するが、同書は「幼稚遊戯」を「五六歳」のこととし、年齢記載のない「夢与仏語」と「四王執蓋」をこれに続ける。つまり先に見た地藏院本および白鶴美術館本の構成と内容は、これに近いものであると言えよう。一方、24『弘法大師行状集記』（以下『行状集記』）および33『弘法大師行化記』（以下『行化記』）には、安楽寿院本と同じ順序の展開が見られる。しかも、それまでは年齢記載がなかった「四王執蓋」に、24『行状集記』は「九歳」、33『行化記』は「八九歳」という年齢を与え、これら三事蹟の前後関係を確定している点が注目される。

1—5 「学習明敏」（図2） 外戚阿刀大足に文書を学んだという事蹟。絵は、その場面と思われるが、同じ服を着た稚児が三人おり、写し崩れの可能性も考えられる。

1—6 「十五入京」 十五歳、京に上ったという事蹟。絵は三場面からなり、順に陸路、海路、再び陸路を行くところ。

1—7「聞持受法」 入浴後、動操に会い、大虚空蔵并能満虚空蔵法を授けられたという事蹟。絵は、対面するところと受法するところ。

1—8「槐市讀仰」 十八歳、大学寮に出て、味酒淨成や岡田博士から五經三史を学んだという事蹟。絵は三場面からなり、文書を学ぶところが繰り返されている。

右の四段は、経史の修学と動操からの受法を表したものである。地藏院本および白鶴美術館本は「聞持受法」以外の三事蹟を合わせて一段とし、絵は「槐市讀仰」に対応する場面だけを描く<sup>(註5)</sup>。大師の年齢については、入京時の「十五歳」以外は記載がなく、文脈からは入浴後すぐに槐市に交わったように読み取れるが、その後位置する「聞持受法」の冒頭にも「御入浴の後」とあり、この間の前後関係が曖昧である。しかし段の順序に従えば、槐市に交わった後に動操に会ったことになり、安楽寿院本とは逆順である。また地藏院本および白鶴美術館本の「聞持受法」には、右の内容のほか、経史を学んだ後も専ら仏教を好み、遂に『龔瞽指帰(三教指帰)』を著し、自ら進士(近士の誤か)となつて無空と名付けたことなどが語られている。安楽寿院本では、このうち無空命名の件は2—4「諸処練行」に見えるが、『龔瞽指帰(三教指帰)』については触れていない。

大師伝では、安楽寿院本と同じ展開は2・5『遺告』、24『行状集記』、29『弘法大師御伝』(以下『御伝』)、33『行化記』などに見られる。一方、地藏院本および白鶴美術館本と同じ展開は9『贈大僧正空海和上伝記』、14『修行縁起』、16『弘法大師伝』などに見られる。この異同は古くから指摘されており<sup>(註6)</sup>、大師伝研究の大きな問題点であるが、大師伝絵巻との関連においても注目すべき要点である。

1—9「誓願捨身」(図3) 讃岐の国の険しい山で、弘法の誓願を発し峰から谷へ三度身を投げけるが、天人に助けられたという事蹟。

絵は、如来が現した蓮台が大師を助けるところ。この段以後、2—1「室戸修行」の第一場面を除き、2—7「剃髪出家」まで、大師は有髪のまま袈裟を付けるという、他の大師伝絵巻には見られない特異な姿で描かれる。これは「槐市讀仰」に記載された十八歳以後、二十歳の「剃髪出家」までの期間に当たり、在俗の身で修行をする立場を象徴するものと思われる。ところが、地藏院本および白鶴美術館本は、「誓願捨身」を「六七歳」の事蹟とし、大師を「幼稚遊戯」「四王執蓋」と同様の幼児の姿に描いている。

この事蹟は大師伝にはなく、7「阿波国太龍寺縁起」に「忽擲身於巖洞。于時護法受之接足。諸仏助之以摩頂。是則捨命預諸天之加護」とあるのが、これを想起させる唯一の記述であるが、舞台は讃岐国ではない。この後には「大滝飛剣」の事蹟が続き、ともに十五歳から十八歳の間の出来事とされている点も、安楽寿院本とは異なる。なお、白鶴美術館本が収録する事蹟について、それぞれの出典を指摘した日野西真定氏は「誓願捨身」については「事相目錄」を挙げている<sup>(註7)</sup>。

2—1「室戸修行」(図4) 土佐国室戸崎で修行したとき、海中の毒龍を調伏したという事蹟(室戸伏龍)と、明星が飛来して口に入つたという事蹟(明星入口)。絵は、それぞれの場面を描く。地藏院本は「明星入口」のみを収録し、白鶴美術館本は「室戸伏龍」と「明星入口」の二段に分割して両者を収録する<sup>(註8)</sup>。大師伝では「明星入口」は「遺告」以来、諸書に収録される代表的な事蹟であるが、「室戸伏龍」は24『行状集記』と28『弘法大師御伝』だけに見える。

なお、この段から2—6「桂谷降魔」までの六段の事蹟は、安楽寿院本では出家前の修行中の出来事として扱われているが、これらの事蹟の出入、また2—7「剃髪出家」と2—8「登壇受戒」も含めての展開順序には、大師伝、大師伝絵巻ともに異同が多く、興味深い問題

が含まれている。しかし、この点については別稿で検討することとし、ここでは触れないでおく。

2-2 「天狗問答」(図5・6) 室戸崎から三十里ばかり離れた所に金剛定寺を建てるとき、火炎を起こして桶の洞の中に住む天狗たちを退散させ、その洞の中に「わが行末の御形」を作つて据えたという事蹟。絵は、天狗を退散させる所と、安置した像と対座する所。大師は有髪であるのに、将来の姿である洞内の像は既に僧形であることが注目される。地藏院本および白鶴美術館本では内容が一部相違し、金剛定寺建立の後、仏法の妨げをなす天狗たちと問答をして、これを退散させるという話になっている。大師伝では、金剛定寺の名は度々見られるが、24『行状集記』と37『弘法大師行化記』に魔縁が妨難をなしたという記述があるのみで、天狗や大師像の話は見あたらない。日野西氏は出典として『御遺告頭書』を挙げている<sup>(註17)</sup>。

2-3 「大滝飛剣」 阿波国大瀧寺で修行したとき、悉地の相が現れ、天より大剣が飛来したという事蹟。絵は、大剣が飛来する所。地藏院本にはないが、白鶴美術館本には同内容が収録されている。大師伝では3・5『遺告』以来の諸書が、阿波の大瀧嶽で修行したことを先述の「明星入口」の前で述べているが、大剣飛来のことを語るのは6『空海僧都伝』が初めてである。

2-4 「諸処練行」(図7) 俗教の空しさを悟り、近土となつて無空と名付け、諸処をめぐり修行を重ねたという事蹟。絵は、大師が老僧に合掌する所。背景には多数の社殿が描かれている。この社殿からは、詞書末尾の「熊野権現も大師御参詣の時始て法体をあらはし給へり」を描いたものかと推定されるが、老僧は役行者の図様に似ており、その前の「大峰葛城をもとほり給ける」の可能性や、両者を折衷した可能性も考えられる<sup>(註18)</sup>。

地藏院本および白鶴美術館本には、右の内容全体に対応するものは

なく、先述の如く、無空命名の部分が「聞持受法」の文中にあるだけである。また、大峰で修行することは地藏院本5-4および白鶴美術館本6-8「大峰修行」にも見えるが、内容的に対応するとは言いがたい。表では「聞持受法」に対応させたが、むしろ安楽寿院本独自の事蹟と見る方が適切であろう<sup>(註19)</sup>。大師伝では3・5『遺告』に、詞書の一節「一期の後は風やみなん。真の福田に帰せんにはしかじとて、近土と成りて御名をば無空とぞ付給けり。」および「嚴冬の深雪には藤の衣をきて精進の道をあらはし、炎夏の種熱には穀漿を断て朝暮に懺悔をおこたらず」に対応する文言があり、以後、諸書に同様の記載があるが、大峰や熊野の名は見あたらない。

2-5 「老嫗授鉢」 播磨国を通りがかつたとき、行基菩薩在俗の折の妻であつたという老女から、釈尊ゆかりの鉢を供養されるという事蹟。絵は、老女の家を訪ねるところと、供養を受ける所。ただし、絵には若い女が描かれている。地藏院本にはないが、白鶴美術館本は同内容を収録し、さらに、大師が老女の家の柱に書き付けた「天地合」という三文字を洗つて飲めば万病が癒えたという話を付加する。大師伝では、鉢の件は2・5『遺告』以後の数点に、文字の件は14『修行縁起』と29『御広伝』にあり、28『御伝』、37『弘法大師行化記』、46『弘法大師伝指示抄』、47『弘法大師要文抄』の四点は両者を収録する。

2-6 「桂谷降魔」(図8) 伊豆国の桂谷という山寺(後の修善寺)で修行をしたとき、魔縁の障難を防ぐために虚空に大般若の魔字品を書く所、その文字が顕現したという事蹟。絵では、文字とともに大日如来が顕現している。地藏院本および白鶴美術館本も同様であるが、大日如来の姿はなく、構図は三者三様である。大師伝では2・4・5『遺告』以来、諸書に収録されるが、そこでは虚空に書写したことが述べられるのみで、原因となつた魔障についての言及はない。

2—7「剃髪出家」 延暦十二年(七九三)、二十歳のとき、勅撰に従って和泉国槇尾寺で剃髪し、名を如空、後に教海と改めたという事蹟。絵は、剃髪するところ。

2—8「登壇受戒」 延暦十四年(七九五)、二十二歳のとき、東大寺戒壇院で具足戒を受け、名を空海としたという事蹟。絵は、戒壇院に入るところ。

地蔵院本および白鶴美術館本は右の二段を一段とし、絵は剃髪の場面のみを描く。大師伝では、2『遺告』に受戒の件が、3『遺告』に剃髪の件が、また5『遺告』には両者が語られており、以後、諸書に収録される。なお、受戒の年齢には諸説があるが、この点は2—1「室戸修行」以降の展開と絡めて別稿で検討する。

3—1「久米東塔」 夢告を得て、大和高市郡久米寺の東塔心柱から大日経を発見し、入唐を決意するという事蹟。絵は、東塔に至るところと、発見した経を読むところ。地蔵院本および白鶴美術館本も同様である(註2)。大師伝では『遺告』以来、ほとんど変化することなく諸書に収録されている。

3—2「勅許入唐」 延暦二十三年(八〇四)、三十一歳のとき、留学の勅命を受けて遣唐使藤原賀能と共に第一船に乗る。五月に京を出て筑紫に下り、肥前国松浦から出帆したという事蹟。絵は、船に荷を積むのを見守るところ。

3—3「入唐著岸」(図9) 海路三千七百里を渡って、八月の初めに福州に着岸したという事蹟。絵は、下船したところ。

地蔵院本および白鶴美術館本は右の二段を一段とし、絵は何れとも異なる場面、すなわち海上に浮かぶ遣唐船を描く(対応関係はB)(註2)。

また、着岸した場所は福州ではなく、衡州とする。大師伝では、3・5『遺告』、24『行状集記』等は衡州とし、7『阿波国太龍寺縁起』、14『修行縁起』、28『御伝』等は福州とする。松浦の地名を記載する

のは28『御伝』、29『御広伝』のみである。

3—4「大師替書」 大使が州長に送った手紙が受け入れられず、大師が代書して、ようやく上陸を許可されたという事蹟。絵は、大師が代書するところ、州長がこれを読むところ、および大使と大師が州長に直面するところ。地蔵院本および白鶴美術館本も同様である。大師伝では3・5『遺告』以来、諸書に見える。

3—5「存問勅使」 州長が長安に上奏し、三十九日を経て資糧を賜る。州長は「十三の旅館」を作って大師らを住まわせる。また、五十日を経て都から存問勅使が下されたという事蹟。絵は、州長の命により旅館が建てられるところ。

4—1「長安入京」 長安入京を上奏して迎客使を賜り、入京後、宣陽坊の官宅に据えられるという事蹟。絵は、迎客使に先導され、遣唐使の一行が長安に入るところ。

地蔵院本および白鶴美術館本は右の二段を一段とし、絵は後者に類似した場面を描く。大師伝では、これも3・5『遺告』以来、諸書に収録されるが、記述が簡略化されている場合が多い。存問勅使を賜るまでの日数は五十八日が通例であり、五十日とする例は他には見られない。

4—2「西明留住」(図10) 翌年二月、大使は帰郷し、大師と橋逸勢は西明寺に留まるといふ事蹟。絵は、大使との別れを惜しむところ。

4—3「青龍拜謁」 名徳を尋ね、青龍寺の恵果和尚に会い奉るといふ事蹟。絵は、恵果に直面するところ。

4—4「青龍灌頂」(図11) 六月に胎蔵界の、七月に金剛界の、そして八月に伝法阿闍梨位の灌頂を受けたといふ事蹟。絵は、恵果に従い、灌頂の壇に入るところ。

地蔵院本および白鶴美術館本は、右の三段を一段とし、さらに恵果

が両界曼荼羅を初めとする種々の品々を大師に与えて懇ろに教戒したことや、東寺に十種の殊勝があることを付加する<sup>2520</sup>。このうち両界曼荼羅等を与える件は、安楽寿院本では5-2「道具相伝」に見える。絵は「青龍灌頂」に対応する場面だけを描く。大師伝では3・5「遺告」が安楽寿院本に即した内容を記載しており、以後、多少の異同はあるが、諸書に収録されている。

5-1「珍寶怨念」 大師への授法に反対した玉堂寺の珍寶は、四天王に責められる夢を見て、翌朝、大師に謝罪したという事蹟。絵は、珍寶が四天王に責められるところと、大師に謝罪するところ。地藏院本および白鶴美術館本も同様である。大師伝では3・5「遺告」以後、諸書に見られる。

5-2「道具相伝」 死期が近いことを悟った惠果は「兩部の大法、一百余部の金剛乘の法、及三藏伝付の物、并供養の具等」を悉く大師に与えたという事蹟。絵は、相伝すべき品々を前に、惠果と大師が対座するところ。地藏院本および白鶴美術館本では、同名の事蹟がこれに対応するが、先述の如く「青龍灌頂」に対応する段の詞書にも、安楽寿院本に一致する文言が見られる<sup>2521</sup>。大師伝では「遺告」以後、諸書に見られ、24『行状集記』等には相伝した道具のリストも掲載されている。

5-3「惠果入滅」 唐永貞元年（延暦二十四年、八〇五）十二月、惠果は大師に懇ろに遺告した後、入寂する。その墓碑銘を大師が作ったという事蹟。絵は、惠果が入滅し、人々が悲しむところ。地藏院本および白鶴美術館本も同様であるが、碑文を引用しているので詞書が長い。大師伝では9『贈大僧正空海和上伝記』以後、数点に見られるが、簡略な記述が多く、惠果の遺告の内容が語られるのは28『御伝』に至ってである。

5-4「惠果影現」 惠果入滅の夜、大師の前に惠果が現れ、師資

相承の宿縁を語るという事蹟。絵は、大師の前に惠果があらわれたところ。地藏院本および白鶴美術館本も同様である。大師伝では16『弘法大師伝』に初出し、18『秘密家宗體要文』、24『行状集記』等に見える。

5-5「梵僧授經」 長安の礼泉寺で般若三藏に對面し、華嚴經、六波羅密經、梵夾を託されるという事蹟。絵は、般若三藏に對面するところ。地藏院本および白鶴美術館本にはないが、十二卷本「弘法大師行状檢詞」第四卷第九段に類話が見える。大師伝では24『行状集記』、28『御伝』などに引用される『請來目錄』の「梵夾三口」の項に、安楽寿院本の詞書と一致する内容の付記が見られる。また29『御広伝』には、惠果の碑文作成に続き、「先是」のこととして般若三藏ほか二名の僧に会うという話が記されているが、これはむしろ十二卷本の内容に一致するものである。

5-6「五筆勅号」 唐帝の勅命を受けて宮中の壁に書をなすとき、奇瑞を現して「五筆和尚」の号を賜ったという事蹟。絵は、両手足と口に筆を持ち、五行の詩を同時に書くところと、壁に墨をかけた「樹」という文字を表すところ。地藏院本および白鶴美術館本では6-1「帝賜念珠」と合わせて一段になっているので、その項で合わせて述べる。

5-7「流水点字」 (図12) 城中を遊覧しているとき、流水のほとりて童子に会い、流水に文字を書いたという事蹟。はじめに大師が詩を書き、次に童子が「龍」という文字を書くが、小点を打ち忘れる。これを加えると文字は忽ち真龍となって昇天し、童子は文殊菩薩の姿を現して消えたという。絵は、大師が書くところ、童子が書いた文字を見るところ、龍が昇天するところ、大師が文殊菩薩を見送るところ。地藏院本および白鶴美術館本にも同様の話があるが、流水に書く前に虚空に書く話があることと、打ち忘れた小点を加えるのが大師になっ

ている点に相違がある。大師伝では、安楽寿院本と一致する内容が14『修行縁起』に初出し、以後、諸書に見られる。

6-1「帝賜念珠」 帰朝する前に、唐帝から「形見として」菩提子の念珠を賜るという事蹟。絵は、唐帝から念珠を受け取ったところ。先述の如く、地藏院本および白鶴美術館本では5-6「五筆勅号」と合わせて一段となり、念珠を賜る理由は、帰朝に際しての「形見」ではなく、「仰信を表して来縁を契らんが為」となる。絵は、五筆で書くところと念珠を賜るところを描く。大師伝では14『修行縁起』、28『御伝』等に地藏院本および白鶴美術館本と同じ展開が見られるが、28『御伝』は別に「帝賜念珠」に対応する事蹟も収録している。また24『行状集記』、29『御広伝』等は、安楽寿院本と同じく二つの事蹟を別々のこととして収録している。

6-2「投擲三鉢」 唐元和元年（大同元年、八〇六）八月、明州の津から帰朝する際、誓願を発し「密教流布相應の勝地」を求めて、日本の方へ三鉢を投げたという事蹟。絵は、投げた三鉢が雲に乗って飛び去るところ。地藏院本および白鶴美術館本も同様である。ただし、安楽寿院本は三鉢の行方を不明とするが、地藏院本および白鶴美術館本は今の高野山金剛峯寺であると明記する。大師伝では7「阿波国太龍寺縁起」に「擲三股於紫雲ト三生身入定地」とあるのが初出で、14『修行縁起』以後の諸書には誓願の件も含めて収録されている。また25『弘法大師伝』、34『弘法大師行化記』等は、三鉢の落ちた地を東寺、高野山、室生戸崎の三カ所とする点で特異である。

6-3「帰朝著岸」 帰郷のとき、船内に桓武天皇崩御の噂が流れ、十月、太宰府に着いてから事実であったことが知られるという事蹟。絵は、既に着岸し、人夫達が船荷を下ろすのを見るところ、続いて陸の建物の中にも大師と思われる僧が三回描かれている。ただし、いずれの場面も詞書の内容とは直接関係しない。

表では地藏院本の「帰朝上表」、白鶴美術館本の「着岸上表」と「帰朝上表」を対応させたが、共通するのは三段とも大同元年十月に帰朝したという部分だけである。安楽寿院本の主題とも言える桓武天皇崩御の件は、地藏院本、白鶴美術館本だけでなく、他の大師伝絵巻にもない事蹟であり、むしろ「高祖大師秘密縁起」独自のものと見た方が適切である<sup>26)</sup>。大師伝では、3・5『遺告』、24『行状集記』、28『御伝』等に天皇崩御の件が見える。

6-4「著岸上表」 十月中旬頃、請来品の目録を太宰大監高階真人遠成につけて上奏し、その年は筑紫国で暮れたという事蹟。絵は、高階遠成と対座するところ。表で前段に対応させた三段は、むしろこの段の内容に一致する。ただし、帰朝した年は観世首寺（筑紫国）に逗留し、翌年上洛した件を述べるのは、白鶴美術館本3-9「着岸上表」だけである。大師伝では、上表の件は9『贈大僧正空海和上伝記』に初出し、以後、諸書に見える。

6-5「賀春生木」 豊前国賀春明神に参詣し、香水を加持して巖石ばかりの山に草木を生い茂らせたという事蹟。絵は、社殿の前で加持するところ。周囲には緑が茂り、桜花が咲いている。地藏院本にはなく、白鶴美術館本のみが同内容を収録する。大師伝では24『行状集記』、28『御伝』、37『弘法大師行化記』に見える。

6-6「清涼宗論」 清涼殿で諸宗の学徒と対論したとき、即身成仏を具現して人々の疑念を解いたという事蹟。絵は、毘盧舎那仏に変わった大師を人々が拝敬するところ。地藏院本および白鶴美術館本も同様である。大師伝では、「即身成仏」の語は7「阿波国太龍寺縁起」に初出するが、詳しい内容が語られるのは13『孔雀経音義序』以後である。

7-1「応天門額」 弘仁元年（八一〇）、応天門の額を書くとき、小点を打ち忘れ、下から筆を投げて書き加えたという事蹟。絵は、投

げ上げた筆が額に届くところ。地藏院本および白鶴美術館本にはないが、十二巻本「弘法大師行状絵詞」の第五巻第五段に同様の話がある。大師伝では14『修行縁起』に初出し、以後、諸書に収録される。

7-2「参詣御廟」河内国の聖徳太子廟に百日詣をしたとき、九十六日目の夜半に阿弥陀三尊の影向を拜したという事蹟。絵は、阿弥陀三尊を礼拝するところ。地藏院本および白鶴美術館本も同様である。大師伝にはない事蹟であり、長谷宝秀氏<sup>25</sup>および日野西氏<sup>26</sup>は、出典として『上宮太子廟参拝記文』を挙げる。

7-3「東大寺蜂」東大寺に長さ五寸もある大蜂が現れ人々を悩ませたが、大師を別当に補して住まわせると消え失せたという事蹟。絵は、人々が蜂から逃げまどうところ。地藏院本にはなく、白鶴美術館本のみが同内容を収録する。大師伝では24『行状集記』と28『御伝』に見える。

7-4「久米講経」大和国久米寺で大日経を講じたとき、「日本国の大小の神祇本地垂迹のかたちをあらはして」聴聞に訪れたという事蹟。絵は、講経するところ。地藏院本および白鶴美術館本も同様である。ただし、詞書通りに「垂迹のかたち」で参集するのは安楽寿院本のみである。大師伝にはない事蹟であり、長谷氏は『久米寺流記』を、日野西氏は『大日経疏縁起』を出典に挙げている<sup>27</sup>。

7-5「高野尋入」(図13) 弘仁七年(八一六)の夏、畿内を修行しながら伽藍建立の地を求めていたところ、大和国宇智郡で二匹の犬を連れた「猟者」に会うという事蹟。その男は「南山の犬飼」と名乗り、「幽然たる平原」があることを教えた後、犬とともに失せたといい。絵は、猟者に出会うところ。

7-6「明神来告」(図14) その日は「紀伊国のさかひ大河と云所」で日が暮れたので「あやしの民の屋」に宿を借り、そこで「老翁」から「ひるは常に奇雲たなびき、夜な々々靈光を現ず」る霊地の様を

聞くという事蹟。ところが、絵は「老翁」を描かず、前段と同じ「猟者」が大師と対座しているところを描く。屋外には二匹の犬も居り、この男が「猟者」こと「南山の犬飼」であることは明らかである。詞書と絵の間に、このような齟齬が生じていることに注目しておきたい。

7-7「丹生献地」(図15)「彼翁」とともに「其所」を歴覽し、勝地であることを知るといふ事蹟。続いて「此猟者」は高野大明神あるいはその母丹生明神の化現であったことを説く。絵は二場面からなり、ともに「猟者」に案内されて山中を行くところ。「翁」ではなく「猟者」を描くのは前段と同様であり、これは絵が詞書を正確に理解していなかったことを示唆するものと思われる。しかし、この段では詞書も「彼翁」を「此猟者」と呼ぶ箇所があり、詞書の側にも混乱が生じている。

7-8「三鈷放光」(図16) 官奏を経て高野山の地を賜り、寺院建立のために樹を切りひらいたとき、唐から投げた三鈷杵が松の枝に懸かっているのを発見し、密教有縁の地であったことを知るといふ事蹟。絵は、松にかかる三鈷杵を見上げるところ。

右の四段は高野創建に関わる事蹟である。地藏院本および白鶴美術館本では「高野尋入」から「三鈷宝剣」までの四段に類似した内容が収録されており、その対応関係は表の通りであるが、内容的には異同も多い。例えば、大師が二匹の犬を連れた「猟者」に出会うのは同様であるが、「あやしの民の屋」の「老翁」は登場せず、「老翁」が語る内容は「猟者」の台詞として「高野尋入」に記載されている。また「巡見上表」を見ると、霊地へ案内するのは「彼翁」ではなく、「猟者」の連れていた二匹の犬であり、高野大明神と丹生大明神については「丹生託宣」に安楽寿院本よりも詳しい内容が記されている。そこには「翁」が登場しないので、安楽寿院本のような混乱が生じることもなく、それなりに整合性のある展開になっていると言えよう。7-

8 「三鈷放光」については、冒頭の上表の件は「巡見上表」の末尾で語られ、三鈷発見の件は「三鈷宝剣」で語られるが、後者には三鈷に続いて宝剣が発見される話が付加されている。

大師伝では、14『修行縁起』に安楽寿院本とはほぼ一致する内容、すなわち「狛者」との出会いから三鈷発見に至るまでの経過が、宝剣発見の話も含めて記載されている。ただし「老翁」は「山民」と表記される。29『弘法大師御広伝』、31『東要記』、33『弘法大師行化記』等も同様である。また、30『金剛峯寺雜文』は14『修行縁起』を収載するが、別に丹生高野両神の化現である「狛師二人」に会うという特異な話も収録しており、この点で注目される。一方、『遺告』には「明神示現」あるいは「明神衛護」の語や、「吾上登日現」人体語曰「あるいは「吾上登日託」巫祝曰……等の文言があるが、まだ「狛者」という形は出てこない。これらは恐らく14『修行縁起』の話の段階にあたるものであろう。表では、「高野尋入」から「丹生献地」までの三段に分割して対応させることが難しいので、一括して扱った。『遺告』の引用は16『弘法大師伝』、24『行状集記』、28『御伝』等に見られるが、適宜取捨されている。なお、この四段の事蹟については、改めて別稿で検討することにした。

8-1 「心経講讀」 弘仁九年（八一八）の春、疫病で多くの死者が出たため、天皇自ら般若心経一巻を書し、大師を請じてこれを供養させたという事蹟。絵は、市中の病人や死人の様子と大師が宮中で講讀するところ。

8-2 「暗夜日光」 前段の続きで、その講讀が終わらないうちに効験が現れ、病人は忽ち平癒し、死者は蘇生し「夜変じて日光赫々たり」となったという事蹟。絵は、前段と同じ講讀の場（大師の姿は御簾の内側に隠されている）と、雲間から現れた日輪を人々が拝するところ。

右の二段は一連の出来事を表したものである。地藏院本および白鶴美術館本も同内容を収録する。しかし、大師伝にはない事蹟であり、長谷氏と日野西氏は「般若心経秘鍵跋」を出典に挙げている<sup>123)</sup>。

8-3 「稻荷来影」 弘仁年中、稻を担った翁（稻荷大明神の化身）が東寺を訪れ、仏法守護を申し出るといふ事蹟。絵は、稻を背負った翁を真雅が呼び止めるところ。地藏院本および白鶴美術館本とは展開が多少異なるが、話の主題に大差はない。ただし、安楽寿院本が「此あたりに留りて」としか記さないところを、地藏院本および白鶴美術館本は「今の稻荷山」と明記する。大師伝にはない事蹟であり、長谷氏と日野西氏は『稻荷大明神流記』を出典に挙げている<sup>124)</sup>。

8-4 「守敏加持」 嵯峨天皇の御前で、守敏僧都が呪力で生粟を茹でるのを、大師が妨げるといふ事蹟。絵は、守敏が呪力を用いるのを隣室から窺うところ。地藏院本および白鶴美術館本もほぼ同様であるが、安楽寿院本の茹栗に対し、これら二本は焼栗とする。大師伝では24『行状集記』、28『御伝』等に安楽寿院本と一致する内容が収録されている。また14『修行縁起』、28『御伝』には、「主上嫌膳以呪力熟生粟献之」といふ記述があり、粟を茹でるのが守敏ではなく大師になっている点と、茹でる理由が明記されている点が注目される。

8-5 「神泉祈雨」(図17) 天長元年(八二四)、大旱魃の際に神泉苑で諸雨経法を行い、大雨を降らせたといふ事蹟。これに先立ち、守敏が試みるが雨は京中しか降らず、次に大師が行うとき、守敏は諸龍を水瓶の中に閉じこめて大師の妨害をする。しかし、大師は独りだけ漏れていた善如竜王を神泉苑に勧請して雨を降らせたといふ。絵は、加持する大師の前に竜王が現れたところで、龍王は「金色八寸の小龍ながさ九尺計の龍の頂に乗り給へり」といふ詞書通りに「龍」として表されている。

地蔵院本および白鶴美術館本もほぼ同様であるが、龍王を「龍」ではなく「蛇」とする点と、神泉苑や龍王についての説明が加わる点が異なり、絵にも「蛇」を描いている。大師伝では『遺告』以来諸書に見えるが、絵巻三本の展開に最もよく合致するのは24『行状集記』である。2・4『遺告』は「祈雨」を行ったことを簡潔に述べるだけであり、3・5『遺告』は善如竜王出現については詳しく述べるが、守敏は登場しない。祈雨の時期と理由を「天長年中有旱災」と明記するのは、9『贈大僧正空海和上伝記』が初めてである。24『行状集記』は、3・5『遺告』を引用した後、「又或曰淳和帝御即位天長元年甲申依旱災」として、守敏との経緯を含めた内容を語るが、善如竜王の姿の具体的な記述がなく、絵巻三本よりも省略された内容になっている。また29『御広伝』では、早魃とは関係なく、守敏と大師の駿競べの話に変じている点が注目される。31『東要記』上巻には神泉苑についての詳しい記述がある。なお善如竜王の姿については、3・5『遺告』以来「蛇」とする方が多いが、25『弘法大師伝』、33『行化記』等は「金色小龍乗ニ丈余蛇ニ」とし、29『御広伝』は「黒龍頂居ニ一尺金色竜王ニとする。安楽寿院本の「小龍」と「龍」が何を典拠とするのかは、さらに検討を要する問題である。

8-6「対治疫鬼」 天長年中、高雄寺に籠居しているとき、大納言良房卿の家で疫病がおこり、参向するかわりに真然に五鈷杵と念珠を授けて遣わし、平癒させたという事蹟。絵は、良房邸で真然が加持祈禱するところ。地蔵院本にはなく、白鶴美術館本のみが同内容を収録する。大師伝では24『行状集記』と28『御広伝』が同内容を収録する。9-1「南円堂鎮」(図18) 左大臣藤原冬嗣から家門繁昌を相談された大師は、山階寺に南円堂を建立し不空鞞索観音を据える。そのとき、春日大明神が「翁」の姿で現れ、藤原氏繁栄の和歌を詠んだという事蹟。絵は、堂の建築工事をするところ。ただし、翁は描かれて

いない。

地蔵院本にはないが、白鶴美術館本は同内容を収録し、その後さらに、白川院のとき南円堂の側に塔を建てるために地を拓いたところ、大師が納めた金銅の筥を掘り出したという話を付加する。絵も、この筥の発見を描いている。つまり安楽寿院本は南円堂創建を主題とするのに対し、白鶴美術館本はむしろ金銅の筥に関心を向けているのである。大師伝では、17『大師御伝』に冬嗣による南円堂創建と大師の鎮壇のことが、『三僧記類聚第二』の引用として簡略に記されているのが初出であり、「翁」詠歌の件は24『行状集記』、28『御広伝』、29『御広伝』に記載されている。しかし、金銅の筥の件は見あたらない。9-2「隔河書額」 高雄寺在任のとき、勅命により額を書くが、勅使が雨で増水した清滝川を渡ることができず、川越しに筆を揮ったという事蹟。絵は、大師と勅使が河を挟んで向き合うところ。地蔵院本にはなく、白鶴美術館本のみが同内容を収録する。大師伝にはない事蹟であり、長谷氏と日野西氏は出典として『事相目録』を挙げている(註20)。

9-3「猿献薯蕷」(図19) 高雄寺で法華修行をしていた頃、山中から一匹の猿が聴聞に訪れ、薯蕷を捧げるのを日課にしたという事蹟。絵は、経巻を開く大師に猿が捧げものをすること。薯蕷は長芋というが、絵では実の付いた木の枝のように描かれている。

9-4「法華経会」(図20) 前段の続きで、ある日、猿が来ないのが気になって山中を探してみると、芋を取るために掘った深い穴の中に落ちて死んでいた。そこで、この猿のために法華経を書写し、法華会を始めたという事蹟。絵は、猿を引き上げるところ。

右の二段は、地蔵院本、白鶴美術館本だけでなく、他系統の大師伝絵巻にもない事蹟であり、「高祖大師秘密縁起」独自のものである。大師伝では29『御広伝』に初出し、37『行化記』、47『弘法大師伝要

文抄』が同内容を収録する。

9-5「観法無碍」 四天王寺の西門で日想観を修すれば、僧形のまま頭上に宝冠が現れたという事蹟と、水輪観に入る時は室内に水が満ち溢れ、覧字観を喫らせば堂上に火災が生じたという事蹟。絵は三場面からなり、右の内容をそれぞれ描く。地藏院本にはないが、白鶴美術館本では「西門日想」が前者に、「観法無碍」が後者に対応する。大師伝では14『修行縁起』、29『御広伝』等に二事蹟とも見えるが、連続して語られているわけではない。また24『行状集記』と28『御広伝』には後者だけが収録されている。したがって、この二事蹟を組み合わせるのには「高祖大師秘密縁起」独自の構成である。

9-6「後七日法」 承和元年（八三四）十一月、毎年正月に後七日御修法を行う由を上奏し勅許を得るという事蹟と、弘仁十四（八二三）年、東寺を賜り教王護国寺と名付けたという事蹟。絵は、後七日御修法をおこなうところ。地藏院本および白鶴美術館本では、後七日御修法の件は「後七日法」に、東寺の件は「東寺勅給」にあり<sup>(註10)</sup>、ともに安楽寿院本よりも詳しく記述されている<sup>(註11)</sup>。大師伝では、後七日御修法を行うこと自体は16『弘法大師伝』に初出するが、上奏の件は19『真言付法纂要鈔』以後、24『行状集記』、29『御広伝』、33『行化記』等に見える。なお修法については31『東要記』が詳しい。

一方、東寺勅給の件は『遺告』以来、諸書に収録されている。

9-7「親王御影」 真如親王が「末の世の御形見」にと大師の肖像を描こうとしたとき、大師自ら目を点じたという事蹟。絵は、真如親王が大師を前に肖像を描くところ。地藏院本および白鶴美術館本にはないが、十二巻本「弘法大師行状絵詞」の第十巻第三段に同様の話がある。大師伝にはない事蹟であるが、28『御広伝』は「真如親王模写真影二鋪。一鋪安置高野山。一鋪隨身渡唐。世俗伝之。」という一文を載せて、この絵の存在を伝えている。

10-1「門徒雅訓」（図21） 天長九年（八三二）、高雄を離れて高野に移り、京への往来のための宿所として淳和天皇より弘福寺を賜る。高野に大塔等を建立するが、あるとき入定を思い定め、諸弟子を集めて遺告する。また承和（八三五）二年三月十五日、重ねて遺告するという事蹟。絵は、大師の前に諸弟子が集い、悲しむところ。外に桜花が咲いていることから、二回目の遺告の場面と思われる。

地藏院本および白鶴美術館本では、大塔建立や弘福寺の件は「大塔建立」で、一回目の遺告の件は「門徒雅訓」で、そして二回目の遺告以後、入定、奥院への移送等の件は「入定留身」でそれぞれ語られている<sup>(註12)</sup>。絵は、地藏院本の「門徒雅訓」に安楽寿院本と類似した場面が見られるが、これは一回目の遺告を描いたものなので、対応関係はB2である。白鶴美術館本の「門徒雅訓」に描かれている修法の場面は恐らく転写の際の誤写と思われるが、かわりに「入定留身」の冒頭に地藏院本の「門徒雅訓」と同じ図様が入り込んでいる<sup>(註13)</sup>。詞書と対応させるならば、これが承和元年三月の遺告の場面となり、安楽寿院本と同内容と見なされる。

大師伝では、2『遺告』は承和元年十一月十五日付、他三本は承和二年三月十五日付である。また6『空海僧都伝』には「承和五年五月晦日、召諸弟子等語（後略）」とある。以後の諸書は、これらを適宜引用したものである。

10-2「入定留身」（図22） 承和二年（八三六）三月二十一日、大師は遂に入定する。その後、大師を奥院に移し、石壇を築いて「塔婆」を立てたという事蹟。絵は、塔婆を立てるところ。地藏院本および白鶴美術館本では、詞書は「入定留身」の後半がこれに対応し、絵は地藏院本の全体、および白鶴美術館本の冒頭（遺告の場面）を除く部分に対応するが、ともに御影堂から奥院へ大師を移送するところを描いたものであり、対応関係はB1である。

大師伝では、6「空海僧都伝」に「右脇唱滅」「依遺教奉歛東峯」とあるのが初出である。また「塔婆」を立てる件は、14『修行縁起』に「安置五輪卒塔婆」とあるのが初めてであり、以後諸書に見える。

10-3「慈覚靈夢」 ある人が「高野大師の真言は少荒涼なるべし」と言ひの聞いた慈覚は、その夜の夢で、大師の弟子康修から庭に浮かぶ蓮華上の五鈷杵が大師であると告げられたという事蹟。絵は、建物の中で眠る慈覚と蓮華上の五鈷杵を描く。地藏院本にはなく、白鶴美術館本のみが同内容を収録する。ただし、ある人が大師の真言を難じたという部分は省略されており、靈夢を見た理由がわからなくなっている。大師伝では、28『御伝』、29『御広伝』等に安楽寿院本と一致する内容が収録されている。

10-4「大師諡号」(図23) 醍醐天皇の御世、観賢僧正は勅賜の装束を持って奥院へ参詣し、廟窟を開いて大師の髪を剃り、衣を改めたという事蹟。このとき、観賢の弟子淳祐は大師の姿を見ることはできなかつたが、わずかに膝に触れることができたという。また観賢の上表により、延喜二十一年(九二二)、弘法大師の号が贈られたこと、および天安元年(八五七)、真済の上表により僧正(大僧正の誤り)が贈られたことが語られている。絵は、観賢が大師を拜するところと、大師の髪を剃るところの二場面を描く。なお観賢の傍らの稚児は、第一場面で大師の膝に右手を伸ばしていることから、淳祐であるべき人物を誤写したものと思われる。

地藏院本および白鶴美術館本では、観賢の参詣と大師号の件は「大師号事」に見える。大僧正の件は地藏院本にはないが、白鶴美術館本では9-5「贈官位」に見える<sup>(E.26)</sup>。大師伝では、大師号の件は11『請賜諡号表』に始まり、14『修行縁起』以降の諸書に「弘法大師」の名が見えるが、観賢参詣の件は24『行状集記』が初出であり、さら

に淳祐の件は28『御伝』で初めて語られる。また大僧正の件は、9『贈大僧正空海和上伝記』以後の諸書に収録されている。

10-5「道風受罰」 大師の書額を難じた小野道風は、その夜、空から下りてきた大きな足に頭を強く踏まれる夢を見たという事蹟。絵は、室内で眠る道風の頭を大きな足が踏みつけるところ。地藏院本にはないが、白鶴美術館本では8-7「皇嘉門額」の段に、朱雀門の額を「朱雀門」と難じた道風が忽ち罰を受けたという話が収録されている。詞書は安楽寿院本よりも詳しい内容を含んでいるが、絵には表されていない。大師伝では25『弘法大師伝』に、前出の応天門の話に続いて「朱雀門」の件が語られている。また28『御伝』には、応天門、皇嘉門、朱雀門の三話が揃って収録されている。

10-6「高野臨幸」 白川院が高野山へ臨幸したという事蹟。絵は、臨幸の行列が進むところ。詞書は地藏院本の「高野珍瑞」および白鶴美術館本の「高野臨幸」の後半にはほぼ一致する。絵は、白鶴美術館本は類似した場面を描くが、地藏院本は全く異なり、高野の山景を描く。大師伝にはない事蹟であり、長谷氏は『太上皇参高野記略』を典故に挙げている<sup>(E.27)</sup>。また日野西氏は14『修行縁起』、29『御広伝』、『高野山秘記』等を出典として挙げているが、これは白川院臨幸の部分ではなく、白鶴美術館本(地藏院本も同じ)の前半、すなわち高野山や金剛峯寺に関する記述の部分についての出典である<sup>(E.28)</sup>。

#### 結びにかえて

本稿では、安楽寿院蔵「高祖大師秘密縁起」について、「高野大師行状図画」の地藏院本および白鶴美術館本との比較を行うとともに、漢文大師伝諸本との関連を検討した。その結果、絵巻二本との比較では、構成や内容に大きな異同が生じている場合がいくつか見い出された。また、漢文大師伝との関連では、『遺告』、14『修行縁起』、24

番号	大 師 伝 絵 巻			大 師 伝							
	安楽寿院本	地藏院本	白鶴美術館本	5	14	16	24	28	29	33	
36	6-3 帰朝著岸	4-1 帰朝上表㉔ C	3-9 着岸上表㉔ A 4-1 帰朝上表㉔ C	24			33	27	33	27	
37	6-4 著岸上表	4-1 帰朝上表㉔ A	3-9 着岸上表㉔ C 4-1 帰朝上表㉔ A		28	26	34	28	34	28	
38	6-5 賀春生木	—————	4-2 賀春生木㉔ A				35	38			
39	6-6 清凉宗論	6-1 宗論㉔ A	4-5 清凉成仏㉔ A		30		36	29	50		
40	7-1 応天門額	—————	—————		29	28	45	36	35	29	
41	7-2 参詣御廟	4-2 大師参詣御廟㉔ A	4-4 参詣御廟㉔ A								
42	7-3 東大寺蜂	—————	7-10 東大寺蜂㉔ B				38	46			
43	7-4 久米講經	5-5 久米寺講經㉔ A	5-6 久米講經㉔ A								
44	7-5 高野尋入	4-5 高野尋入㉔ A	7-1 高野尋入㉔ A		34				36	31	
45	7-6 明神来告	4-5 高野尋入㉔ C	7-1 高野尋入㉔ C		35				37	32	
46	7-7 丹生献地	4-6 巡見上表㉔ B1 4-7 丹生託宣㉔ D	7-2 巡見上表㉔ B1 7-3 丹生託宣㉔ D	28	36	35	52	32	38	33	
47	7-8 三鈷放光	4-6 巡見上表㉔ C 4-8 三鈷宝剣㉔ A2	7-2 巡見上表㉔ C 7-5 三鈷宝剣㉔ A2	27	67	33	51		39	34	
48	8-1 心經講讀	5-1 秘鍵開題㉔ A1	7-7 秘鍵開題㉔ A1								
49	8-2 暗夜日光	5-2 権者自称㉔ B	7-8 権者自称㉔ B								
50	8-3 稻荷来影	5-8 稻荷契約㉔ A2	5-2 稻荷契約㉔ A2								
51	8-4 守敏加持	5-3 守敏降伏㉔ A	8-2 守敏降伏㉔ A				48	43			
52	8-5 神泉祈雨	5-6 神泉苑㉔ A	8-1 神泉祈雨㉔ A	25	40	31	40	44	43	36	
53	8-6 对治疫鬼	—————	8-5 对治疫鬼㉔ A				49	45			
54	9-1 南円堂鎮	—————	5-7 南円堂鎮㉔ B				46	48	56		
55	9-2 隔河書額	—————	4-8 隔河書額㉔ A								
56	9-3 猿献薯蕷	—————	—————						54		
57	9-4 法華經会	—————	—————						55		
58	9-5 觀法無碍	—————	6-11 西門日想㉔ A 5-11 觀法無碍㉔ A	33					51		
59	9-6 後七日法	6-3 後七日法㉔ A 5-7 東寺勅給㉔ C	9-1 後七日法㉔ A 7-11 東寺勅給㉔ C	30	39	27	37	30	42	35	
60	9-7 親王御影	—————	—————					54			
61	10-1 門徒雅訓	4-9 大塔建立㉔ C 6-4 門徒雅訓㉔ B 6-5 入定留身㉔ C	7-6 大塔建立㉔ C 9-2 門徒雅訓㉔ B 9-3 入定留身㉔ A	29	41	34	47-54	31	41		
62	10-2 入定留身	6-5 入定留身㉔ B	9-3 入定留身㉔ B		44	37	56	51	47	40	
63	10-3 慈覚靈夢	—————	9-6 慈覚靈夢㉔ A					42	58		
64	10-4 大師諡号	6-8 大師号㉔ A	9-7 贈大師号㉔ A 9-5 贈位官符㉔ D	46	39	58	52	49-57	42		
65	10-5 道風受罰	—————	8-7 皇嘉門額㉔ C					37		30	
66	10-6 高野臨幸	6-7 高野珍瑞㉔ B	10-6 高野臨幸㉔ A								

表 安楽寿院蔵「高祖大師秘密縁起」と諸本の対応関係一覧表<sup>(註24)</sup>

番号	大 師 伝 絵 巻			大 師 伝							
	安楽寿院本	地蔵院本	白鶴美術館本	5	14	16	24	28	29	33	
1	1-1 誕生靈瑞	1-1 大師誕生① A	1-1 誕生奇特① A	(2)	1	1	1	1	1	1	
2	1-2 夢与仏語	1-2 幼稚遊戯② A1	1-2 幼稚遊戯② A1	1	3	2	2	2	2	2	
3	1-3 四王執蓋	1-3 四王執蓋③ A	1-3 四王執蓋③ A		4		3	10	4	3	
4	1-4 幼稚遊戯	1-2 幼稚遊戯② A	1-2 幼稚遊戯② A	2	2	3	4	3	3	4	
5	1-5 學習明敏	1-5 明敏篤学⑤ C	1-5 明敏篤学⑤ C	3	5	4	5		5	5	
6	1-6 十五入京	1-5 明敏篤学⑤ C	1-5 明敏篤学⑤ C	4	6	5	6	4	6	6	
7	1-7 聞持受法	1-6 聞持受法⑥ A	1-6 聞持受法⑥ A	5	8	7	7	8	7	7	
8	1-8 槐市讚仰	1-5 明敏篤学⑤ A	1-5 明敏篤学⑤ A	6	7	6	8	5	8	8	
9	1-9 誓願捨身	1-4 誓願捨身④ A	1-4 誓願捨身④ A								
10	2-1 室戸修行	—————	1-8 室戸伏龍⑧ A				15	41			
		1-8 明星入口⑧ A2	1-11 明星入口⑪ A2	8	11	9	11	11	11		
11	2-2 天狗問答	2-1 天狗降伏⑨ A	2-1 天狗問答⑫ A				14				
12	2-3 大滝飛劍	—————	1-7 大滝飛劍⑦ A		10		12		10		
13	2-4 諸処練行	1-6 聞持受法⑥ C	1-6 聞持受法⑥ C	7	9	8	13	6	9	9	
14	2-5 老嫗授鉢	—————	6-7 天地合字⑤ A	10	32	12	16	47	52	10	
15	2-6 桂谷降魔	2-3 魔事品⑪ A	1-9 書経降魔⑨ A	11	12	10	44	35	12	11	
16	2-7 剃髮出家	1-7 出家受戒⑦ A	1-10 出家受戒⑩ A	12	13	11	9	7	13	12	
17	2-8 登壇受戒	1-7 出家受戒⑦ C	1-10 出家受戒⑩ C	13	14	13	10	9	14	13	
18	3-1 久米東塔	2-4 久米寺東塔心柱⑩ A	2-2 久米東塔⑬ A	14	15	14	17	12	15	14	
19	3-2 勅許入唐	2-5 大師御入唐⑬ B	2-4 勅許入唐⑮ B	15	16	15	18	13	16	15	
20	3-3 入唐著岸	2-5 大師御入唐⑬ B	2-4 勅許入唐⑮ B	16	17	16	19	14	17	16	
21	3-4 大師替書	2-6 入唐着岸⑭ A	2-5 入唐着岸⑮ A	17		17	20	15	18	17	
22	3-5 存問勅使	2-7 入唐入洛⑯ C	2-6 入唐入洛⑰ C	18		18	21	16	19	18	
23	4-1 長安入京	2-7 入唐入洛⑯ A	2-6 入唐入洛⑰ A	19	18	19	22	17	20		
24	4-2 西明留住	3-2 大師御入壇⑱ C	3-2 在唐入壇⑲ C	20	19	20	23	18	21	19	
25	4-3 青龍拜謁	3-2 大師御入壇⑱ C	3-2 在唐入壇⑲ C	21	20	21	24	19	22		
26	4-4 青龍灌頂	3-2 大師御入壇⑱ A	3-2 在唐入壇⑲ A	22	21	22	26	20	23	20	
27	5-1 珍寶怨念	3-3 珍寶怨念⑳ A	3-3 珍寶怨念⑳ A	26	23	26	25		25	21	
28	5-2 道具相伝	3-2 大師御入壇⑱ C 3-5 道具相承㉑ A	3-2 存唐入壇㉑ C 3-5 道具相伝㉑ A	23	22	23	27	21	24	25	
29	5-3 惠果入滅	3-6 惠果入滅㉒ A	3-6 惠果入滅㉒ A			24	30	23	26		
30	5-4 惠果影現	3-7 惠果影現㉓ A	3-7 惠果影現㉓ A			25	31	24	27		
31	5-5 梵僧授経	—————	—————				28	22	28		
32	5-6 五筆勅号	2-8 五筆和尚号⑯ A1	2-7 五筆勅号⑱ A1		24	29	42	33	29	22	
33	5-7 流水点字	2-9 虚空書字⑰ A2	2-8 虚空書字⑱ A2		26	30	43	34	30	23	
34	6-1 帝賜念珠	2-6 五筆和尚号⑯ A	2-7 五筆勅号⑱ A		25		29	35-39	31	24	
35	6-2 投擲三鉢	3-8 大師擲三鉢㉔ A	3-8 投擲三鉢㉔ A		27		32	26	32	26	

『行状集記』、28『御伝』、29『御広伝』等、数点の資料が特に重要であるように思われた。しかし、本稿は安楽寿院本の特質を考察するための資料編的なものであり、ここでは、右の問題を考察する余裕はない。この点については、別稿で改めて論じる予定である。

## (注)

- 1 梅津次郎「池田家藏弘法大師伝絵と高祖大師秘密縁起」『美術研究』七八号、昭和十三年、『絵巻物叢考』（中央公論美術出版、昭和四十三年六月）所収。
- 2 長谷宝秀編纂『弘法大師伝全集』第九巻、六次新報社、昭和十年、昭和五十二年復刻（株式会社ビタカ）、二六四—三〇三頁。
- 3 梅津次郎「弘法大師絵巻の諸本について」『弘法大師行状絵巻』東京美術、昭和五十六年。同書は東寺藏「弘法大師行状絵詞」十二巻の複製であるが、その解説の中に、梅津氏は参考作品として安楽寿院本および白鶴美術館本の全巻写真を掲載している。
- 4 地蔵院本についての主要参考文献は次の通り。梅津次郎「地蔵院本高野大師行状図画—六巻本と元応本との関係—」『美術研究』八三号、昭和十三年、『絵巻物叢考』（中央公論美術出版、昭和四十三年六月）所収。『秘宝高野山』講談社、昭和四十三年。山本智教・真鍋俊照「高野大師行状図画」大法輪閣、平成二年。拙稿「弘法大師伝絵巻の諸問題」『国際交流美術史研究会第八回シンポジウム 説話美術』国際交流美術史研究会発行、平成二年。
- また白鶴美術館本についての主要参考文献は次の通り。注3掲載書。梅津次郎編「弘法大師伝絵巻」角川書店、昭和五十八年。宮島新一「巨勢派論（下）—平安時代の宮廷絵師」『仏教芸術』一六九号、昭和六十一年。
- 5 注2掲載書、第一巻—第三巻。
- 6 四点の正式名称は次の通りである。2『太政官符案并遺告』、3『遺告廿五箇条』、4『遺告真然大徳等』、5『遺告諸弟子等』。
- 7 注1掲載論文。
- 8 例えば、梅津氏は版本および元応本（十巻本）の第一巻第十一段「明星入口」に「相当する秘密縁起の項目」を「無」とするが、この内容は安楽寿院本第二巻第一段「室戸修行」の後半に収録されている。同様に第六巻第十一段「日想観（西門日想）」は、第九巻第五段「観法無碍」の前半に収録されているなどである。
- 9 梅津次郎監修『角川絵巻物総覧』、角川書店、平成七年、二〇二—二〇四頁。なお事項名称には、本稿で用いた巻頭目次ではなく、各段標題を用いている（注10参照）。
- 10 地蔵院本および白鶴美術館本には、制作当初から巻頭目次と各段標題が付されているが、本稿では巻頭目次を事項名称として用いた。ただし白鶴美術館本第三巻第五段「恵果相伝」は「恵果影現」の誤りであるので訂正し、また第三巻第九段は巻頭目次を欠くので各段標題の「著岸上表」を用いた。
- 11 各資料名は、5『遺告諸弟子等』、14『金剛峯寺建立修行縁起』、16『弘法大師伝』、24『弘法大師行状集記』、28『弘法大師御伝』、29『弘法大師御広伝』、33『弘法大師行化記』、以上である。
- 12 これによって事蹟の展開順序がわかるが、中には記述が前後している場合もあり、掲載順序と展開順序は必ずしも一致するわけではない。この点が必要に応じて別稿で述べることとし、本稿では煩雑になるので省略する。
- 13 地蔵院本の「明敏篤学」には、修学の場合が二回繰り返されているが、それ以外の傍らに「味酒淨成」「阿田博士」の書き入れがあることから、ともに上洛後の場面であることがわかる。白鶴美術館本には書き入れはないが、地蔵院本と同じ図様であることから同様に見なすことができる。
- 14 例えば、徳仁上綱編纂『弘法大師年譜』巻二（天保四年、一八三三）の天応七年（大師十五才）の項の割注には「（前略）大師受三求聞持法時日有異。行化諸本。長者記。広伝。集記等。為三入京始。修行縁起。行状略。為三入洛後十八歳前。続後記。扶桑略記。貞観寺伝。真言伝。懺儀抄。釈書等諸書。

- 為「二十八歳已後」。(後略)とある。『全集』第五巻、二十九頁下段。
- 15 日野西真定「高野大師行状図画」に描かれた弘法大師伝「梅津次郎編」弘法大師伝絵巻」所収、角川書店、昭和五十八年。同論文の注1(三十二頁)に列記されている。
- 16 地藏院本および白鶴美術館本の「明星入口」の絵には、大師が岩屋の中で修行する場面、および明星の入口と吐出を表す場面が描かれている。これは3「遺告」等に見られる「上阿波大瀧嶽」修行。或於<sub>二</sub>土佐室生門崎<sub>一</sub>寂暫。心観明星入<sub>レ</sub>口。」に由来するものと思われ、前者は大瀧嶽での修行の場面と見なされるので、絵の対応関係はA2に分類した。
- 17 注15掲載論文。
- 18 役行者は長い髭を生やし、僧衣に袈裟をまとい、錫杖を持って高下駄を履く姿で描かれるのが通例であり、大師伝絵巻では白鶴美術館本6―8「大峰修行」に登場する。安楽寿院本の図では、杵を履き、鹿杖をついているが、熊野権現の本地仏と見るのは無理であり、やはり役行者と見る方が適切であろう。
- 19 注9掲載「角川絵巻物総覧」の解説では、対応する事項は「なし」とした。
- 20 白鶴美術館本2―2「久米東塔」の絵は、地藏院本2―2「我拝師山」と2―3「久米寺東塔心柱」を合わせたような図様であり、誤写の可能性がある。
- 注4拙稿、六八―六九頁参照。
- 21 注9掲載「角川絵巻物総覧」の解説では、「入唐著岸」に対応する事項を「入唐着福州岸」(目次では「入唐着岸」)としたが、「大師御入唐事」(目次では「勅許入唐」)とする方が適切であり、訂正する。
- 22 注9掲載「角川絵巻物総覧」の解説では、「西明留住」に対応する事項を「入唐入洛事」(目次では「長安入洛」)としたが、「大師御入唐事」(目次では「在唐入壇」)とする方が適切であり、訂正する。
- 23 注9掲載「角川絵巻物総覧」の解説では、「道具相承事」(目次では「道具相伝」)のみを対応させたが、「大師御入唐事」(目次では「在唐入壇」)を追加訂正する。
- 24 注9掲載「角川絵巻物総覧」の解説では、対応する事項は「なし」とした。
- 25 長谷宝秀編纂「弘法大師行状絵詞伝」弘法大師一千百年御忌記念事務局発行、昭和九年、一一二―一四頁。同書は明治十二年に東寺が刊行した「大師行状曼荼羅」四幅について、上巻で各図の大意を述べ、下巻で「其の本拠を示して疑義を論」じたものである。安楽寿院本と共通する事項も多く、出典を検索する参考書として便利である。
- 26 注15前掲論文。
- 27 注25掲載書、九六―九七頁。注15掲載論文。
- 28 注25掲載書、一六七―一七〇頁。注15掲載論文。
- 29 注25掲載書、一六二―一六四頁。注15掲載論文。
- 30 注25掲載書、一四〇―一四二頁。注15掲載論文。
- 31 地藏院本の「東寺勅給」は天長元年(八二四)の宣下から始まるが、白鶴美術館本は冒頭に弘仁十四(八二三)年、勅使を賜る件を付加し、その後、地藏院本と本文を続ける(注4掲載拙稿、七十頁参照)。したがって、安楽寿院本と同じ「弘仁十四年」の年記を持つのは白鶴美術館本だけであるが、教王護国寺と名付けたという部分は三者共通である。
- 32 注9掲載「角川絵巻物総覧」の解説では、「後七日法事」(目次では「後七日法」)のみを対応させたが、「東寺勅給」(目次も同じ)を追加訂正する。なお安楽寿院本の詞書は、このほか四帝二后妃の灌頂と毎月十八日の観音供にも言及する。前者は地藏院本4―4「両帝灌頂」で、そのうち二帝二后妃の灌頂は白鶴美術館本7―9「皇帝受法」で、また後者は白鶴美術館本8―4「二間修法」で、それぞれ主題として取り上げられているが、安楽寿院本に対応する内容とは言い難いので、表1には加えなかった。
- 33 注9掲載「角川絵巻物総覧」の解説では、「門徒雅訓事」(目次では「門徒雅訓」)のみを対応させたが、「東寺勅給事」(目次では「東寺勅給」)を追加訂正する。
- 34 注4掲載拙稿、七一―七三頁参照。

35 注9掲載『角川絵巻物総覧』の解説では、「大師号事」（目次では「贈大師号」）のみを対応させたが、「贈官位」（目次では「贈位官符」）を追加訂正する。

36 注25掲載書三五〇—三五六頁。

37 注15掲載論文。

38 表の見方については、緒言の末尾参照。

### 付 記

本稿をなすにあたり、所蔵者各位ならびに京都国立博物館の若杉準治氏のお世話になりました。記して謝意を表します。なお、本稿は平成八年度に鹿島美術財団より助成を受けた研究の成果の一部です。

図1 1-1 「誕生靈瑞」

図3 1-9 「誓願捨身」

図2 1-5 「學習明敏」

図4 2-1 「室戸修行」

図6 2-2 「天狗問答」(部分)

図5 2-2 「天狗問答」(部分)

図8 2-6 「桂谷降魔」

図7 2-4 「諸処練行」

図10 4-2 「西明留住」(部分)

図9 3-3 「入唐著岸」

図11 4-4 「青龍灌頂」(部分)

図12 5-7 「流水点字」

図14 7-6 「明神来告」

図13 7-5 「高野尋入」

図16 7-8 「三鈷放光」(部分)

図15 7-7 「丹生献地」

図17 8-5 「神泉祈雨」(部分)

図18 9-1 「南円堂鎮」(部分)

図20 9-4 「法華經会」

図19 9-3 「猿猴薯蕷」

図21 10-1 「門徒雅訓」 (部分)

図22 10-2 「入定留身」 (部分)

図23 10-3 「大師諡号」 (部分)

## On the Kōso Daishi Himitsu Engi

Kimiko SAODE

The "Kōso Daishi Himitsu Engi" is one of the group of handscrolls that take as their main theme the biography of the priest Kūkai (Kōbō Daishi). It is thought that this type of scroll became established in the latter half of the thirteenth century. The oldest surviving work is the scrolls owned by Anrakujuin-temple, and is dated 1468. This paper discusses the composition and content firstly of the Anrakujuin "Kōso Daishi Himitsu Engi", as part of a consideration of the "kōso Daishi Himitsu Engi" scrolls as a whole. To clarify the characteristics of the Anrakujuin scrolls, it is compared with other types of Kōbō Daishi biographical scrolls such as the "Kōya Daishi Gyōjō Zuga", in Jizōin-temple and the scrolls of the same name in the Hakutsuru Fine Art Museum. This paper also investigates the relationship between the handscrolls and various written biographies of Kobo Daishi in Chinese characters. Discussion of the results of this latter investigation will be deferred to a later date, however, owing to lack of space in the present paper.